

## 『中国地方戯曲集成』の編集出版について

陳 仲 奇

はじめに

1. 『集成』の編集体制の概要
2. 田漢の序文
3. 『集成』の収録作品
4. 『集成』編集出版の歴史的・文化的背景
5. 評価を試みる

### はじめに

1958年から1963年に出版された『中国地方戯曲集成』（以下、『集成』と略す）は新中国が成立して以来、最大規模の国家的文化事業プロジェクトの一つである。この事業の最初の構想は、全国の地方劇の集大成に資するものを作成することであり、全ての省・市・自治区の地方劇の優秀劇目をもれなく網羅・収録し、各巻40万字前後にまとめあげ、およそ20巻余に仕上げることを予定していたものである<sup>1)</sup>。しかし、1963年以後は、社会情勢など諸般の事情により、このプロジェクトはあいにく中断されてしまった。結局、出版され、世に送り出されたのは、15の省・市・自治区に現存しているものに止まり、正確に言えば、一種の未完成の『集成』となったわけである。

それでも、この『集成』は、新中国の最大規模の文化事業という重要性を有することになりは、新中国の演劇史を研究する上では、もっとも重要なテキストとなっていることは疑う余地はない。未完成とはいふものの、現在編集された『集成』には、15の省・市・自治区のものだけでも、121の地方劇種のもを網羅し、368の劇目の脚本を収録し、全部で722万字の大作となっている。しかし、残念なことに、それに関する研究著作は未だに発見されず、それについて紹介する文章もほとんどない。筆者の知る限りでは、1959年『読書』という雑誌に掲載された曲六乙の「戯曲花苑競艶芳一読『中国地方戯曲集成』稿札記」が唯一の関連文章である<sup>2)</sup>。中国作家網によれば、戯曲評論家の曲六乙氏は1952年中南文芸学院の大学院を卒業した後、中国戯劇出版社に勤務することになり、1980年より編集室主任、出版社副総編集長などを歴任し、中国戯劇家協会研究室主任、『中国戯劇年鑑』の主編、すなわち編集責任者となった経歴をもつ<sup>3)</sup>。曲六乙氏の上記の文章の内容は『集成』の収録範囲や主な特徴などについての一般的紹介にとどまり、文章の発表時期も『集成』の出版と前後していることから推測すれば、この文章は『集成』の編集出版に合わせて、その事業に携わってきた業界責任者による宣伝・広告的な役割もっているものだと考えられる。

新中国建国以来最大規模の国家プロジェクトが、実行される途中で未完成のまま中断さ

れてしまう数奇な経緯や、今日までの惨憺たる研究状況から察すると、『集成』の編集出版は当時の社会状況の中で、一種の奇異な風景として、関係者や大衆の目に映ったのであろう。本稿は、この点に着目し、『集成』の編集・出版の過程を検討することを通して、『集成』が誕生する時代と、その特有な文化現象を分析することにより、新中国建国初期に、文芸界知識人の置かれた社会的・文化的立場や状況を解説し、また、共産党指導部の文芸政策とその後の文化大革命を発生・発動させるメカニズムの一端を垣間見ることを試みたものである。

## 1. 『集成』の編集体制の概要

『集成』の編集出版は、中国文化部の主導による国家レベルの一大プロジェクトであった。中国戯劇家協会が主編となり、収録方針から編集指導まで総括的に責任をもち、全国の各省・直轄市・自治区の文化局がそれぞれの地方の戯曲巻を編集し、中国戯劇出版社によって出版されることになる。1958年最初に出版された『湖北省巻』を皮切りに、1963年2月に最後に出版された『遼寧省吉林省黒竜江省巻』まで、計15の省・市・自治区の巻22冊が出版された。

『集成』の編集体制は基本的に統一されている。最初の『湖北省巻』の「出版説明」にあるように、全ての巻が「序・前記・劇種分布図・著名俳優の舞台写真・優秀な劇目の写真・優秀な脚本」<sup>4)</sup>といったような項目からなる予定であった。しかし、数年にもわたる具体的な編集過程においては、全国各省・市・自治区文化局の共同作業であるため、それぞれの実情に応じて変える必要がある一方、また、刻々と変化する社会情勢も反映するようにとの要請があったため、『集成』全体の編集体制にかなりの変化も見られる。まず、表1を参照していただきたい。

表1 『中国地方戯曲集成』各巻の出版概況<sup>5)</sup>

巻名	出版年月	出版説明	序・前言	図・表・舞台写真
湖北省巻	1958	出版説明 1958.9	田漢序 1958.5.1 前言 1957.7.8	附図 湖北全省劇種分布図 舞台写真 45枚
河北省巻 (上、下)	1959.2	出版説明 1958.9	前言 1958.11	附図 河北省戯曲劇種分布図 附表 河北省戯曲專業劇団分布状況 (1958年7月11日) 舞台写真 43枚
浙江省巻 (上、下)	1959.6	出版説明 1959.5	前言 1959.3	附図 浙江省地方戯曲劇種分布図 附表 (表名なし) 舞台写真 25枚
内モンゴ 自治区巻	1959.8	編集説明 1959.7	前言 1959.2.5	附図 内モンゴ自治区劇種分布図 舞台写真 25枚
安徽省巻 (上、下)	1959.8	編集説明 1959.7	前言 1959.5.29	附図 安徽省劇種分布図 附表 安徽省專業劇団分布現況 (1959年1月19日) 舞台写真 36枚
山西省巻 (上、下)	1959.8	編集説明 1959.7	前言 1959.8.15	附図 山西省地方戯曲劇種分布図 舞台写真 38枚
北京市巻 (上、下)	1959.9	編集説明 1959.7	前言 1959.6	図表なし 舞台写真 30枚
上海市巻 (上、下)	1959.9	編集説明 1959.7	前言 1959.6.27	図表なし 舞台写真 32枚

江蘇省卷 (上、下)	1959.12	編集説明 1959.7	前言 1959.7.1	附図 江蘇省地方戯曲劇種分布図 附表 江蘇省地方戯曲劇種分布図 附表 舞台写真 32枚
山東省卷	1960.4	編集説明 1959.7	前言 1959.5	附図 山東省地方戯曲劇種分布図 舞台写真 22枚
広東省卷 (上、下)	1962.2	編集説明 1959.7	前言 1961.5	附図 広東省地方戯曲劇種分布図 舞台写真 28枚
江西省卷	1962.8	編集説明 1959.7	前言 1961.10	図表なし 舞台写真 15枚
遼寧省吉林省 黒竜江省 卷(上、下)	1963.2	編集説明 1959.7	前言 1961.12	附図 遼寧省地方戯曲劇種分布図 吉林省地方戯曲劇種分布図 黒竜江省地方戯曲劇種分布図 舞台写真 29枚

この中で、もっとも重要な変化は「出版説明」を「編集説明」に変えたことである。最初に出版された『湖北省卷』、『河北省卷』と『浙江省卷』は「出版説明」であるが、それ以後の巻はすべて「編集説明」に変わっている。この変化からは、『集成』の出版が初めてのころはかなり急いでいたということが窺える。中国の出版慣例から見れば、この「説明」文は出版社である中国戯劇出版社側が書いたものだが、後に編集体制の確立にともなって、文責が主編者である中国戯劇家協会側に代わったと解釈することができる。

「出版説明」と「編集説明」の文面はほとんど同じものであるが、以下のところで相違点も見られる。

1. 『湖北省卷』、『河北省卷』、『浙江省卷』では同じく、「『中国地方戯曲集成』按省(市)地方卷出版、或幾省(市)合出一卷。由各省(市)文化局分別負責編輯、中国戯劇家協会主編。」となっている所で、『内蒙古自治区卷』以下の各巻は「(市)」を「(市、自治区)」と変えた。それは『集成』出版の最初は漠然と「全国各省(市)」しか想定していなかったところ、『内蒙古自治区卷』の出版により、少数民族の自治区も当然のこと、計画に加わったことによるものであろう。
2. 『湖北省卷』で「『中国地方戯曲集成』内容包括：序、前記、劇種分布図……。」とある所は、『河北省卷』以下の各巻とも、「『中国地方戯曲集成』内容包括：前言、劇種分布図……」となっている。そもそも、田漢の序文は最初の『湖北省卷』のために書いたものであり、ほかの巻はそれと同じような序文を載せることができないため、事実上の総序となっている。その他は、「前記」を「前言」に統一しただけである。
3. 『湖北省卷』では「『中国地方戯曲集成』全書予計編印二十余巻、毎巻四十万字左右、自一九五八年下半年起陸續出版。」の所は、『河北省卷』と『浙江省卷』では、「『中国地方戯曲集成』全書予計編印二十余巻、毎巻三十万字到七十万字左右、自一九五八年下半年起陸續出版。」とある。しかし、『内蒙古自治区卷』以下の各巻は、すべて「『中国地方戯曲集成』全書予計編印二十余巻、自一九五八年起陸續出版。」となっている。それは、最初の『湖北省卷』が一冊しかないため、40万字前後と想定したと考えられる。しかし、『河北省卷』と『浙江省卷』はいずれも内容が多いため、上、下二冊のものになった。『内蒙古自治区卷』以下の各巻はそれぞれ各地の実情に応じて、一冊のものもあれば、上、下二冊のものもあるため、いっそのこと字数の言及を避けることにしたと考

えられる。

4. 「出版説明」と「編集説明」の署名はいずれも「中国戯曲家協会」であるが、しかし、その日付はばらばらになっている。『湖北省巻』と『河北省巻』は1958年9月、『浙江省巻』は1959年5月、『内蒙古自治区巻』以下の各巻は1959年7月となっている。このことから、少なくとも1959年7月以前に『集成』が滑り出したころは、かなりの混乱状態が生じていたのではないかと推測できる。

「出版説明」と「編集説明」に明確に要求した「図・表・舞台写真」の付録情報も、各省・市・自治区ごとにバラつきが見られる。もっとも揃っているのは『河北省巻』、『浙江省巻』、『安徽省巻』、『江蘇省巻』であり、図・舞台写真の付録があるのは『湖北省巻』、『内蒙古自治区巻』、『山西省巻』、『山東省巻』、『広東省巻』、『遼寧省吉林省黒竜江省巻』である。『北京市巻』、『上海市巻』、『江西省巻』は舞台写真の付録しかなく、図・表とも省略されている。

## 2. 田漢の序文

『集成』の最初に出版された『湖北省巻』に、田漢の序文が載せられている。田漢（1898年3月12日－1968年12月10日）は湖南省長沙市の出身で、現代中国の著名な劇作家・詩人である。特に中華人民共和国の国歌『義勇軍進行曲』の作詞者としても名を知られ、中国文芸界を代表する知識人の指導者である。BIGLOGE百科事典によれば、田漢は若いころ、日本に留学し、1917年に東京高等師範学校に学び、このころ、郭沫若と親交があったという。1920年に帰国し、翌1921年に上海にある中華書局に勤務し、妻の易漱瑜とともに雑誌『南国月刊』を創刊し、戯曲も発表した。1925年に『南国社』を創設し、1928年に文学・絵画・音楽・演劇・映画の5部門をもつ南国芸術学院に発展させた。1932年に中国共産党に入党し、1935年の映画『風雲児女』の主題歌として『義勇軍行進曲』を作詞した。中華人民共和国成立後、中国戯曲家協会主席、文化部の戯曲改進黨の局長、中国戯曲学校の初代学長を務めた。田漢は生涯劇作家として第一線で活躍し、自ら『閔漢卿』、『文成公主』などの新劇を創作したほか、京劇など伝統演劇の改革にも指導的な役割を果たし、京劇『白蛇伝』、『謝瑤環』などの脚本も執筆した。1964年以後、相次いで張春橋・康生に陥れられて人身攻撃を受け、1966年の文化大革命で批判され、その渦中で没した<sup>6)</sup>。

田漢の経歴から分かるように、田漢は1958年に『集成』編集出版における実質上の推進者であり、また、そのプロジェクトを遂行させる総責任者でもある。彼が『湖北省巻』のために書いた「序文」は、指導者の立場から、『集成』編集出版の経緯や編集出版の基本精神と指導方針を語っているため、事実上の「総序」となっている。これは、今日、我々が『集成』の指導方針や編集原則などを検討する際、極めて重要な歴史的文献となった。以下、その全文を日本語訳にする。

1950年、中央文化部が戯曲工作会議を開催した後、京劇のほかに、多くの地方戯曲を注目するようになり、党の「百花齊放、推陳出新」の指導方針の下で、地方戯曲の普遍的発展を図るために、次から次へと具体的な取り組みを始めた。例えば、各地の戯曲俳優の思想改造や芸術レベルを高めること、劇団制度の改革、伝統的な劇目の発掘・発展、及び地方大会の開催を通して、俳優たちの思想レベルと芸術レベルの向上を促進するよ

う取り組むことである。1952年の第一回全国戯曲大会には、24の戯曲の種目が参加し、各地の著名な俳優が千人以上出演した。多くの優秀な劇目が上演され、國中数えきれないほどの豊富な戯劇の宝蔵を有していることが証明された。後の情況の進展から分かるように、このような宝物の埋蔵量はわれわれの推測よりも遥かに多かった。1957年、地方劇はすでに310種類にのぼり、発掘された劇目が5万を超えた。1959年は、わが国の建国十周年にあたり、全国各劇種は、偉大な祖国人民、そして、勝利へと人民を導く党に対して、みな積極的に自分たちの最高のプレゼントを献上しようとした。第二次全国戯曲大会の規模と成果は、1952年の大会に比べられないほど、すばらしいものであらうと想像できる。

建国以来、全国各省や市の戯曲改革一特に劇目の改善と創作において得られた成果を報告するために、我々は『中国地方戯曲集成』を出版する計画を立てた。全国のほとんどすべての省、市にはその地方特有の劇種があるが、一部の省や市の劇種が比較的有名である。例えば、陝西の秦腔・四川の川劇・雲南の滇劇などだ。一部の省や市の情況は比較的複雑で、A地区で広がって、著しく発展したB地区の劇種もある。例えば、安徽での黄梅戲や上海での越劇などである。京劇は、その名の通り北京を根拠地とした全国的な劇種であるが、しかし、南北にわたる幾つかの省や市では、人民に好まれ、指導層に提唱され、その上、芸人たちの苦勞と知恵のおかげで独特の創造的な成果が得られ、各地に広げていく価値があるものとなっている。例えば、東北、上海、武漢で上演された幾つかの優秀な京劇や、京劇という手法を使って現代の生活や少数民族の生活を表現する、雲南や黒竜江などでの有益な試みがある。われわれは、これらの京劇の脚本も地方戯曲の範囲内と見なした。實際上、京劇も元々は一種の地方劇種であった。

『中国地方戯曲集成』は、各省（或いは市）で巻を分け、便宜上、各省・市大会における受賞劇目を構成の基礎内容とする。各劇種が北京及び各地で巡回上演した際、最も人気があった劇目も取り入れるようにする。各地の劇目の発展の脈絡と現状、その分布情況、同系劇種の間相互関係と影響などを取り上げ、また、俳優たちの情況や過去の民族・民主闘争中、解放後の各々の闘争中、また社会主義建設中における彼らの仕事ぶりについてもできるだけ詳しく、生き生きと表現したい。

『中国地方戯曲集成』が湖北省から始まったのは、編集上の偶然という理由もあるが、それなりの意義もある。湖北省は全国で劇種の最も多くあった省の一つで、その主要劇種の漢劇は広く伝わっていて、全国の各劇種に多大な影響を与えた。民間の小型劇としての楚劇も四十数年来、迅速な発展ぶりを呈し、多くの著名な芸術家を輩出し、比較的早い時期にある程度の改革を試みた。1956年10月の省大会では、参加する劇種が23種にものぼり、「清劇」のような、忘れ去られた旧劇種も数種新たに発掘された。湖北省の戯劇の情況を、十分に理解、勉強することは、中国の戯曲の発展を理解するにはたいへん有益なこととなる。

劇目においては、われわれは引き続き伝統的な作品を発掘する。各地に埋もれているものはまだたくさんある。しかし、すべての伝統的なものがみな良くて、改良する余地がないわけではない。如何なる伝統的劇目に対しても、必要があれば、われわれは労働者階級の立場に立脚し、数多くの人民大衆の利益を出発点とした公正な審査を行い、伝統的な作品を今日における人民のニーズにより合うように改造・改良しなければならない

い。これこそ、古人のものをわれわれのために役立たせることであり、古人の作品中の陳腐なもの、不健全なものを再び発散・伝染させて今日の人民に害を及ぼすことがないようにしたい。

各地の劇目の中には、現時点の現実社会の思想闘争を描写するものが多く含まれなければならない。京劇の『白毛女』が盛んに上演された時、われわれは地方の劇種に対して、より多くより迅速に、より生き生きとした表現で、現在の生活ぶりを描写しなければならないことを求めた。各地方の劇種は労働者・農民、そして人民大衆との関係が比較的密接であり、生活感や故里・田園的な雰囲気が比較的濃厚であるため、社会の実生活を表現するのは容易であり、それを得意な分野としていると言える。全国解放初期には、たくさんの地方劇種で、多くの現代劇が上演された。漢劇、楚劇も同じである。その中にはきっと比較的完成度の高い現代劇目があったはずだが、残念ながら、これらをきちんとした芸術的な見地から総括し、よって、これらの優秀な劇目を保存し、より良くする作業を実施してこなかった。しかし、それらもわれわれ自身の慣れ親しんだ芸術形式で、目下の建設闘争に寄与するための基礎の一つである。1957年の湖北省大会には、この方面の劇目はまだ多くはないが、今回の全国大会ではこの方面の素晴らしい成果が披露されることを期待している。湖北省の工業・農業の建設が全国の大躍進の中で示した多くの優れたパフォーマンスのように！

過去の多くの地方劇のプログラムには、歴史的なものであれ、現代的なものであれ、俳優や楽師たちがたくさんの美しい表現形式を創り上げたものがある。これらのたくさんの表現形式のうち、一部はきちんと保存されて後世に伝わっていない。非常に惜しいことである。全国解放後、われわれは各地方の関係者に名優たちのこれらの芸術経験・成果を記録しておくように呼びかけた。例えば、上海の関係者が、蓋叫天先生の芸術成果を記録しておいたことは良い例である。『中国地方劇曲集成』も各省・市の同志たちに、脚本を編集する際には、できるだけ何名かの俳優たちの芸術経験の記録を紹介するよう要求してきた。例えば、湖北大和尚（李春森）先生の多くの独創性のある芸術表現は当然記録しておくべきものだし、老牡丹花（薰瑤階）先生の芸術表現もきちんと記録しておくべきであったが、惜しいことに手遅れになってしまった。

『中国地方劇曲集成』を建国十周年の祝賀として献上したいために、われわれは各省・市文化局の同志に呼び掛けて、この編集作業を速やかに進めるように協力を依頼したい。大躍進精神の下に、みんなが力を合わせ、一日も早くこの歴史に残る偉大な作品を完成させるよう尽力してほしい。

田 漢 1958年5月1日<sup>7)</sup>

田漢の序文は次の三点に要約できる。

- (1) 『集成』を世に送り出す目的は、1959年の建国十周年記念に合わせて、党と全国人民に対して報告することであり、また、これを祝賀するためでもある。そのため、『集成』の編集・出版に際しては、建国以来十年間の戯曲界・文芸界の成果を最大限に収録することを目標に掲げなければならない。
- (2) 収録範囲は、基本的に1952年の全国戯曲観摩大会以来の「各省・市大会における受賞劇目を構成の基礎内容とする」。内容の面においては、思想上健全であることと、

形式の面では、芸術的完成度の高いことの両方を備えなければならない。

- (3) 収録の基本方針は、党の「百花齊放、推陳出新」の文芸政策を遵守し、優秀な伝統劇目を重視する。その発掘・改編作業を行うと同時に、新しい時代をより反映できるような現代劇も取り入れるよう気を配る。

それでは、田漢が掲げたこの理想的構想が果たして実現できたか。それを解明するために、以下、『集成』に収録された作品群について検討してみよう。

### 3. 『集成』の収録作品

前述の通り、『集成』の15の省・市・自治区巻の収録範囲は、121の地方劇種にも及び、計368の劇目の脚本が収録され、全部で22冊722万字にのぼる巨大作品になっている。その収録された作品は、主に以下の5種類に分類することができる。

#### (1)各地方劇の優秀な劇目

田漢の序文にも述べられているように、中国の地方劇が極めて豊富で、「1957年」の時点で、「地方劇はすでに310種類にのぼり、発掘された劇目が5万を超えた」とある。その中で、全国的影響のある優秀な劇目はことごとく『集成』に収録されている。例えば、『梁山伯与祝英台』（越劇）、『打金枝』（晋劇・中路梆子）、『十五貫』（昆曲）、『孫安動本』（柳子戯）、『将相和』（京劇）、『両狼山』（山東梆子）、『張三借靴』（贛劇）、『龍虎鬪』（紹劇）などの作品群である。

ここで、『梁山伯与祝英台』、『打金枝』と『十五貫』の三つの劇目を代表的なものとして取り上げ、少し詳しく紹介する。

『梁山伯与祝英台』は、中国四大民間伝説の一つとして、千年以上の長い間、広く民間で伝わっている悲恋物語である。全国範囲で多くの劇種によって上演されているが、見事に入選したのは上海越劇院の脚本であった。この作品は思想の面においては、自由恋愛と男女平等を訴える反封建的精神をもっている。演出や芸術的な面においても、二人の名優袁雪芬・范瑞娟の長年の共演によって、芸術的完成度の高い劇目に仕上がりに、中国では老若男女問わず、絶大な人気を博している。この演劇用脚本は後に映画化もされた。

『打金枝』は、山西省の地方劇の中で最も広く民間に流伝した劇目である。わがままな今上皇帝の娘を嫁にもらった將軍の息子が、その妻を戒める物語である。庶民感覚を皇室の人間関係に持ち込んだ価値判断について、当時の中国学術界では一時ホットな話題として議論・討論された。結局「人民性」に合致しているとの結論に至り、作品が評価され、最終的に中国戯曲史上の一大名作として名を馳せた。『集成』に収録された脚本は、1952年全国第一回戯曲会演の脚本と映画の脚本により改編されたものである。

昆曲『十五貫』も、新中国建国以来の大きな芸術成果の一つである。昆曲は京劇よりも歴史が長く、豊富な劇目と優れた芸術表現の伝統をもつ極めて優秀な劇種であるが、清末以後、著名な俳優の相次いで死亡と国内情勢の混乱の影響でその人気がだんだんと衰えていき、1949年の中国解放直前には壊滅の危機に直面していた。1956年、浙江省昆蘇劇団は、清の朱素臣の『十五貫伝奇』を改編し、その中の不条理な内容と封建的・迷信的な部分を削除し、主人公鐘況、過於執らの人物描写をより生き生きと、きめ細やかなものにした新版の『十五貫』を上演した。北京で上演した時は絶大な人気を博し、一時は「満城争説『十五貫』」、すなわち、北京城内至る所で、誰もが『十五貫』を話題にするというよう

な盛況を呈したという<sup>8)</sup>。周恩来は、『十五貫』の上演座談会の席上で次のように言っている。「『十五貫』の上演が成功したことは、古典芸術昆曲に新たな生命力を与えただけでなく、同時に歴史劇も今日の社会に貢献することができることを証明した。『十五貫』は、文芸領域で党が推進してきた「百花斉放、推陳出新」の政策を遂行する模範的役割を果たした<sup>9)</sup>」。

以上の例に挙げた3部の名作劇目についての分析を通して分かるように、この類の作品は、当時の共産党の文芸政策「百花斉放、推陳出新」、「古為今用、厚今薄古」の方針を忠実に反映したものである。入選作品はいずれも「人民性」が豊かで、「革命現実主義」と「革命ロマン主義」を表現する作品である。1960年代初期から始まったいわゆる「階級分析」と「階級闘争」の文芸理論の影響は、まだそれほど強くなかったと考えられる。

### (2) 著名な俳優の代表作

この『集成』には、『北京巻』、『上海巻』、『広東省巻』などの大都市をもつ地方巻を中心に、当時の中国を代表する著名な俳優たちの代表作がほぼ網羅されている。例えば、梅蘭芳の『貴妃醉酒』、周信芳の『蕭何月下追韓信』、蓋叫天の『快活林』、程硯秋の『春閨夢』、荀慧生の『紅娘』、尚小云的『梁紅玉』、馬連良の『淮河宮』、裘盛戎の『姚期』、李少春の『野猪林』（以上はみな京劇の名作）、俞振飛の『太白醉写』（昆曲）、馬師曾と紅線女の『閩漢卿』、『搜書院』（粵劇）、新鳳霞の『劉巧兒』（評劇）、陳伯華の『宇宙鋒』（漢劇）などの作品群である。いずれも日本で言う人間国宝レベルの名優による傑作である。

京劇の「四大名旦」の一人である梅蘭芳が主役を務める『貴妃醉酒』は、唐の玄宗皇帝の寵愛を一身に受けた絶世の美女、貴妃・楊玉環が、自分と花見をする約束を破って梅妃のところに行った玄宗のことを恨んで悲しみ、一人で悶々と酒を飲み、つい酔ってしまった物語である。この劇は、百年以上もの伝統をもつ劇目で、踊りの部分が多い。梅蘭芳が長年続けた脚本の書き直しと整理によって、健全な京劇歌舞劇となったものである。京劇の南派の代表である「麒麟童」周信芳の『蕭何月下追韓信』は、元の雑劇から改編されたものであり、漢の劉邦と楚の項羽が天下を争った時期の物語である。これは周信芳の芸術表現の最高傑作と言われるものである。程硯秋の『春閨夢』は、杜甫の長詩『新婚別』と『悲陳陶』という詩の中にある「可憐無定河辺骨、猶是春閨夢里人」の両句のイメージを借用したもので、漢末の公孫瓚と劉虞の内戦を背景にした、主人公の王恢とその妻張氏の死別物語である。それは、1931年当時、軍閥たちが入り乱れて争い、人民大衆が戦乱の中で必死にもがいている姿を目のあたりにして、程硯秋が創作した作品であり、作者自身の内戦に反対する立場と、平和を渴望する民衆の願望を代弁する名作である。

### (3) 戯曲史における重要な伝統的劇目

田漢の序文は、上海の蓋叫天、湖北大和尚（李春森）、老牡丹花（薰瑤階）の三人の古参俳優の例を挙げて、伝統劇目の記録整理の重要性を次のように語っている。「過去の多くの地方劇のプログラムには、歴史的なものであれ、現代的なものであれ、俳優や楽師たちがたくさんの美しい表現形式を創り上げたものがある。これらのたくさんの表現形式のうち、一部はきちんと保存されて後世に伝わっていない。非常に惜しいことである」と。彼は、戯曲の伝統的劇目の発掘・記録・改編・継承を呼び掛けているのである。



『集成』の編集においては、各省の地方文化局は、かなりの人的・物的資源を動員し、戯曲史における数多くの重要な伝統的劇目の発掘・整理に取り組んだ。例えば、山西鑊鼓雜戯（龍岩雜劇）『樂毅伐齊』、羅羅腔『小禿取鼓』、耍孩兒『雙獅洞』、安徽徽劇『齊王点馬』、青陽腔『磨房会』、儺戯『孟姜女尋夫』、目蓮戯『羅卜描容』、河北糸弦戯『金鈴記』、老調梆子『調寇』、江西宜黄戯『欄江救主』、青陽腔『三請賢』、広東秦河戯『斬鄭恩』などの作品群は、その代表的なものである。

以下、鑊鼓雜戯、安徽徽劇と青陽腔、儺戯と目蓮戯の戯曲史における意義について述べてみよう。

山西省の鑊鼓雜戯と羅羅腔は、長い歴史をもつ古い劇種である。建国初期の中国では、ほとんど上演する機会がない状態にあったが、戯曲史を研究する上では、非常に貴重な価値がある。鑊鼓雜戯の文武場の音楽・唱・白・動作・服装道具などは、ほとんどすべてのものが他の劇種と異なっている。例えば、晋南の鑊鼓雜戯が上演される時、一人の「打報者」が常時舞台の脇に座る。化粧もせず長い服を着用し、手には薄い黄色の旗をもつ。時には舞台上がって、劇中の役柄を演じて、時には舞台の脇に座って待機し、道具運びなどを担う。いわば「劇中人」と「劇外人」を兼ねている。劇中人の場合は、家院・Y環・報子・龍套などの役柄を担当し、劇外人の場合は、飲場・拉場・挑簾などの仕事を担当する。戯曲史研究の専門家によれば、このような「打報者」には、宋代戯曲の「隊午」の中の「竹竿子」の痕跡が見られ、中国戯曲の原初・原始状態が反映されているものだという<sup>10)</sup>。

青陽腔は、明代の中期、安徽省青陽地方に誕生した劇種であり、徽劇と青陽腔は同じ系統のものである。安徽省の徽劇は主に撥子・吹腔・二黄・西皮・高腔・昆曲が基本的構成要素になっている。その中では、撥子・吹腔・二黄・西皮類の劇目が比較的多い。明末清初に、徽劇の曲調は吹腔から二黄に発展し、次第に徽劇として成熟し、かつ形が定まってきた。それゆえ、徽劇の別名は二黄調とも言う。清の乾隆年間、徽劇は安慶から揚州へ進出し、大変高い評価を得た。『揚州画舫録』には、「二黄が安慶から来たが、色も芸も最も優れ、地元の乱弾を超えた」との記録が残されている。1799年、高朗亭らが徽劇を携えて上京したが、それは初めて北京進出を果たした「三慶班」である。その後、「春台班」、「和春班」「四喜班」も相次いで上京し、合わせて「四大徽班」として、近代戯曲京劇発展の原点となるわけである<sup>11)</sup>。

儺戯と目蓮戯は、ともに宗教的な色彩を帯びた古い劇種である。主に安慶地区と蕪湖地区で流行した。儺戯は、鬼疫を駆除し、吉祥を求める民間の儺舞から発展してきたものである。安慶専区の貴池県には、現在でも一種の「啞儺」が流行しており、それこそが原始的な儺舞である。儺戯の劇目には民間舞踏のミニ劇があり、例えば「打雀鳥」など、全本の戯曲劇目は『孟姜女尋夫』、『劉文龍趕考』、『柳毅伝書』など、わずかしかなかった。これらの劇目は「儺神古調」とも称される。鬼疫を駆除し、吉祥・幸福を求める気持ちを表現する歌舞形式とともに、儺戯は高腔と民謡の形で唄われ、役者は独特な表情をもつお面をかぶって出演する。

目蓮戯も大変古い劇種であり、宋代に「構肆楽人」が「目蓮救母雜戯を演ずる」という資料がある。安徽省の目蓮戯の流伝時期も非常に古く、明の万暦年間、安徽徽州祁門の人鄭之珍がすでに「目蓮救母」の物語を3冊102折の『目蓮救母勸善戯文』として編集した。現在、安徽省の民間では、148出の脚本が発見されている。それは鄭本よりも豊富である。

この事実から推測すると、鄭本は民間流伝しているものに基づいて整理したものか、あるいは後の民間芸人が鄭本を拡大・充実させたものかのどちらかであろう<sup>12)</sup>が、いずれにしても、安徽省目蓮戯が古い伝統をもっていることは明らかである。

#### (4)地方の特色ある劇目

中国の悠長たる戯曲史の中で、地方間の文化交流・相互学習の結晶として、往々にして同じ題材、同じ伝統のものが各地の地方劇に取り込まれている。例えば、梁祝物語、孟姜女の伝説、三国演義、楊家将物語などはほとんど全国的に広がりを見せ、さまざまな地域で庶民に親しまれている作品群である。また、異なる劇種の中でも、音楽の曲調、芸術的表現手法などの面では、互いに影響し合う例が多数見られる。前述した青陽腔・徽劇・昆曲・京劇はその典型的な例である。しかし、『集成』には、各省の文化局がそれぞれの担当地域の特色ある劇目を可能な限り収録しているため、それは民族文化の多様性をよりの確に反映したものとなっている。

この種の劇目には、三つの特色がある。その一は、当地にしかないものであること、その二、当地の風習・風土・人情を反映したものであること、その三、芸術形式が独特であること、の三つである。

例えば、『内蒙古自治区卷』の二人台『走西口』は、その代表的なものと言える（旧社会における人民の苦しい生活を描いた物語。新婚夫婦が生活に苦しみ、夫が出稼ぎに出て、離れ離れになる話）。『安徽省卷』の蘆劇『借羅衣』も同様のものである（喜劇、里帰り物語。この劇は、古参芸人の口述に基づいて大幅な整理を加えたもの）。『湖北省卷』の『葛麻』は楚劇の伝統劇目であり（喜劇、下男の葛麻が結婚をめぐって地主の馬鐸と闘う話）、第一回全国戯曲觀摩大会で脚本賞を受賞し、後に映画化もされた。そのほか、『湖北省卷』の灯戯『雪山放羊』（童養媳と意地悪な姑の物語）、『山東省卷』の茂腔『羅衫記』（訴訟物語）なども地方の特色に富んだ秀作である。

#### (5)建国十年來の新興劇目

田漢の序文にも明らかに宣言された通り、新中国の文芸政策は「百花齊放、推陳出新」と「二本足で歩く」の方針を徹底していた<sup>13)</sup>。もし(1)から(4)の作品群が「百花齊放、推陳出新」を体現するものとすれば、(5)の「建国十年來の新興劇目」は「二本足」のもう一本の足、すなわち、毛沢東の「古為今用」、「厚今薄古」<sup>14)</sup>の文芸方針を忠実に実行したものと見えよう。『集成』各省、市、自治区卷の中の3割前後はこの種の作品である。

この新興劇目には以下の3種類の作品が含まれている。

- A. 建国以來創作された革命歴史劇。例えば、錫劇『紅色的種子』、桂劇『紅河烽火』、昆曲『紅霞』、淮劇『一家人』、滬劇『母親』と『黃浦怒潮』、評劇『苦菜花』など、いずれも革命時期の共産党の歴史を反映するものである。
- B. いわゆる「新編歴史劇」。例えば、揚劇『碧血揚州』、『百歲掛帥』、京劇『打乾隆』、『血染長平』、『将相和』、『獵虎記』、『黒旋風李逵』など。これらの歴史劇はマルクス主義の歴史観に基づき、人民大衆の視点で歴史を語り、人民大衆を教育する目的で編纂されたものである。
- C. 当時の社会現実を反映する現代劇。呂劇『李二嫂改嫁』、龍江劇『寒江関』、滬劇

『羅漢銭』、越劇『祥林嫂』、京劇『白毛女』、北京曲劇『柳樹井』など。その中には、劇種そのものさえも大躍進の産物である吉劇『燕青売銭』のような作品が「百花斉放」のモデルとして収録されている<sup>15)</sup>。

ここまで述べてきたように、『集成』のこの5種類の作品群は基本的に当時の共産党の文芸政策を反映するものであり、収録された作品も1952年の第一回全国戯曲観摩大会以来1956年前後までの各地方の省・市レベルの戯曲大会での受賞作であるため、建国以来の地方劇の集大成と言えよう。しかし、あまりにも人民性ばかりを強調したため、多くの優秀な伝統劇が落とされ、また、収録されたものの中でも、過度な改編を加えられたため、蛇足や駄作になったものもある。特に1959年以後に出版された巻の中では、社会情勢がますます急変し、『集成』の編集も大躍進のうねりに巻き込まれていき、『浙江省巻』にある『関不住的姑娘』と『三擺渡』のようなものも収録されている。『関不住的姑娘』は当時のダム建設の話（大晦日にダム建設に行こうとする娘が、母に部屋に閉じ込められても、逃げ出して工事現場へ行った。その母もつい感動し、一緒に労働に参加するという話）であり、『三擺渡』は農村の新婚物語（隣村の田植え競技会に参加するため、新婚夫婦が役所に入籍手続きを遅らせるという話）である。確かに当時の社会現実の一面は反映しているが、その赤裸々な宣伝色は今考えると、『集成』当時の編集者たちも忸怩たる思いをするに違いがなかろう。

#### 4. 『集成』編集出版の歴史的・文化的背景

『湖北省巻』「前言」の日付は1957年7月8日となっている。これにより『集成』編集出版の立案は少なくとも1957年7月の時点で始動したと言えよう。当時の中国は「反右派」運動の最中で、社会生活全般が急激に変化し、極めて不安定な時代となっていた。このような社会的背景は、当然のこととして『集成』の編集出版にも影響を及ぼしていたはずである。以下、1957年の「反右派」運動を境目にして、『集成』の置かれた歴史的・文化的背景を検証してみよう。

##### (1) 「双百方針」による文芸界の春

中国建国初期の文芸政策は、1942年5月2日に発表された毛沢東の「延安文芸座談会での講話」（以下『文芸講話』と略す<sup>16)</sup>）の基本精神を継承するものであった。『文芸講話』の主旨は、文学芸術が、政治闘争の道具であり、知識人・作家などの文芸工作者は立場を根本的に変え、工場へ行き、農村へ行き、労働者階級と生活を共にし、彼らと思想・感情を共有すべきであり、また、労働者階級の視点で、新しい文芸作品を創作し、「工農兵（労働者・農民・革命軍人）」のために奉仕すべきだということである。それゆえ、建国間もない1950年11月27日から12月11日まで、全国戯曲会議が北京で開催され、愛国主義の人民新戯曲の創作を急務とした方針が通達・確認された。また、1951年5月7日、周恩来が署名した政務院『戯曲改革工作についての指示』が公表され、全国の文芸団体・組織に対して「改戯」・「改人」・「改制」に関する六ヶ条の「指示」が出された。同日、『人民日報』にも「戯曲改革工作を重視せよ」の署名討論文章が発表された<sup>17)</sup>。「改戯」とは、伝統劇目の発掘・整理・改編・改造のことである。「改人」とは、旧社会で活躍してきた芸人たちに政治学習・思想改造に取り組ませることを指す。「改制」とは、制度面で「旧班主」

が主導した封建的劇団組織を改編し、各地の劇団を各省・市の文化局に属させることによって、組織面において共産党の支配を徹底させることである。この一連の戯曲改革の取り組みは、すべて『文芸講話』の基本精神の下で行われたと考えるのが妥当であろう。

『文芸講話』の政治道具論や「工農兵（労働者・農民・革命軍人）」のために奉仕すべき論調が強調される一方、共産党政権が全国を掌握して、基本組織が次第に確立されていくに連れて、共産党指導部はある程度の執政能力における自信と、文芸政策における寛容さをもつようになった。「百花斉放、推陳出新」という有名な文芸政策は、まさにこの時期の産物である。1951年4月3日、中国戯曲研究院（中国芸術研究院の前身）が北京に設立されたとき、毛沢東が「百花斉放、推陳出新」の題辞を贈った。また、毛沢東は1956年4月25日の中国共産党中央政治局の拡大会議の席上、「十大関係を論ずる」という講演を発表し、正式に科学文化の領域で「百花斉放、百家争鳴」の方針を打ち出し、芸術分野には「百花斉放」、学術分野には「百家争鳴」を重ねて表明した。社会主義国家としての文化の繁栄を希望し、促したのである。

しかし、毛沢東のこの「百花斉放、百家争鳴」という「双百方針」は裏目に出た。毛の本来の考えとしては、各民主党派に呼び掛けて、当時行われていた共産党の「整風運動」に積極的に参加させて党に建設的な意見・提案を出させ、新政権の優れたところや、全国民を重視する民主的なところを大々的に演出・宣伝したかったのだが、思いもよらず、これをきっかけにして章伯鈞・羅隆基を代表とする民主党派と各界の著名な知識人たちが、共産党の一党独裁の国策に対する不満を一気に爆発させた。一時期、全国有名紙で共産党幹部を批判する文章が相次いで掲載され、一部の過激な知識人は共産党と民主党派が政権交代すべきだとまで要求・要望した。これにより、毛沢東の堪忍袋の緒が切れてしまった。1957年6月8日の『人民日報』で「これはなぜだ」をテーマとする社説が発表され、同日、中国共産党中央の名義で「右派分子の進攻に反撃せよ」という指示が通達された。中国史上かの有名な反右派運動が始められたのである。6月14日、『人民日報』がもう一つの社説（一説では毛沢東が自ら書いた）『文匯報の一時期の資産階級の傾向』を発表し、その中で、毛沢東は「双百方針」の策定が「蛇を穴から出して殲滅する」ためのもので、それは「陰謀」ではなく「陽謀」だと言い逃れをすることになった。

今から考えると、そもそも「百花斉放」と「百家争鳴」は本質的に違うものであった。「百花斉放」は、君主の命令で洛陽の御花園の花たちが季節外れの冬にも一斉に咲いたという武則天と洛陽牡丹の民間伝説に由来するもので、あくまで共産党の指導の下での文芸界の「百花斉放」を歓迎することを意味していたが、「百家争鳴」は人々に春秋戦国時代の諸子百家のことを想起させ、共産党も「百家」の中の一家として、民主党派と同列にされる羽目になったため、毛沢東にとっては、とうてい容認できるものではなくなったのである。

それはさておき、現在、われわれが確認できることは、少なくとも1956年の「双百方針」が提出された当時は、確かに文化・芸術界にとっての春だったと言えよう。毛沢東の「十大関係を論ずる」の講話一ヶ月後、中央宣伝部長の陸定一が知識人を相手に「百花斉放、百家争鳴」の講話をし、次のように述べた。「われわれは文学芸術の仕事と科学研究の仕事の中で以下のことを提唱する。独立思考の自由・弁論の自由・創作と批評の自由・自分の意見を発表・堅持・保留する自由である」<sup>18)</sup>。

建国初期のこのような寛容かつ自由な文芸政策は、旧社会以来の芸人たちに社会的、政治的地位の向上と生活の安定をもたらし、彼らは心から共産党と新社会に感謝しつつ、絶大な情熱で伝統劇目の発掘、改編、創作に従事して、多くの優秀劇目を創出した。まるで新時代の華やかな文芸復興の幕開けのようであった。不完全なものではあるが、『集成』各巻から拾ってみると、この時期には全国各地で以下のような戯曲会演が行われた。

- 1952年10月 全国第一回戯曲観摩大会、23の劇種、100近い劇目が上演。
- 1954年 華東戯曲会演。上演劇種・劇目不明。
- 1954年春 天津市第一回戯曲会演。河北梆子『教学』、評戯『婦女代表』、『井台会』が受賞、その他不明。
- 1954年末 北京市第一回戯曲観摩会演。演出劇団21、上演劇目26。
- 1955年 内蒙古自治区第一回民族民間音楽・舞踏・戯曲会演。上演劇種・劇目不明。
- 1956年 湖北省第一回戯曲観摩大会。31の劇種、119の劇目が上演された。
- 1957年 湖北省戯曲会演。上演劇種・劇目不明。
- 1957年 江蘇省第一回戯曲会演。京劇『倩女離魂』、蘇劇『花魁記』、錫劇『紅樓夢』などが受賞、その他は不明。
- 1957年11月 内蒙古自治区第一回戯曲観摩演出会。9の劇種、53の劇目が上演された。
- 1959年5月 広東省全省戯曲会演。上演劇種・劇目不明。

ここで指摘しておきたいのは、『集成』に収録された作品の大多数はこれらの観摩大会での受賞作であった点である。

## (2)毛沢東の独走と周恩来ら穏健派の抵抗

1957年の「反右派運動」は重大な歴史事件となり、1978年中国共産党の第十一回三中全会後の統計で分かるだけでも、1957年の「反右派」と翌年の「右派補課（右派人数の追加と拡大）」で結局、全国552,877人が右派とされた<sup>19)</sup>。これらの右派たちはその後党籍・公職を剥奪され、一部は投獄され、大多数は工場、農村に「労働改造」のために追放された。前中国総理朱鎔基もその一人であった。これにより、中国の民主党派と知識人たちは政治に口を挟むことができず、言論の自由への道が閉じられ、共産党の一党独裁がますます強化されるようになった。

「反右派運動」では毛沢東本人も、深刻な挫折を味わった。毛沢東から見れば、共産党の整風運動が民主党派の右派たちに利用され、プロレタリア革命家の偉大な胸襟を開示するどころか、とうとう秦の始皇帝の「焚書坑儒」と同様になってしまったのである。毛の専属医李志綏によれば、毛沢東は一時期、朝から晩までベッドで寝込み、精神が鬱状態になり、風邪もひいて、その自信も大きな打撃を受けたという<sup>20)</sup>。そもそも「陽謀」論とは毛沢東の事後の粉飾に過ぎなかった。

それ以後、毛沢東はますます知識人に不信感を抱き、自由闊達を尊重した文芸政策も革命時代の政治論・階級論に回帰した。毛沢東は自分の偉大さと正しさを証明するためか、成果を出すことに焦り、今まで周恩来や陳雲たちに任せていた経済建設分野にも手を出し始めた。

1956年第二次五ヶ年経済計画を策定するに際して、中国の経済建設分野で一種の「冒進

（無謀な前進）」の傾向が台頭し、その規模が過大になり過ぎて資金・原材料が不足し、市場供給が滞りだしたため、周恩来・陳雲らの指導の下で「反冒進」運動が行われた。「反冒進」運動で暴露された共産党幹部の無謀、無能力の問題点は1957年の「大鳴大放」の時、民主党派の共産党批判にも利用された。毛沢東から見れば、民主党派の「右派」と共産党内部の周恩来を主とする穏健派の「右傾」は内外呼応するものと映った。1958年の初めごろから、毛沢東は党内の「反右傾」にも乗り出す。1月11日から22日までの「南寧会議」で、毛沢東は周恩来を名指しで批判した。「あなたは『反冒進』ではないか、私は『反冒進』に反対するのだ<sup>21)</sup>。それ以後、連日共産党中央政治局で周恩来・陳雲らに「検討（自己反省）」を強要し、「反冒進」の批判を行った。5月5日から行われた共産党第八回二中全会で、毛沢東は再び陳雲と周恩来に「自我検討」をさせ、周恩来を辞職寸前まで追い込んだ<sup>22)</sup>。

1958年から1960年までの三年間は、毛沢東が自ら経済建設の主導権を握り、中国の粗鋼生産量について「三年で英国を超え、十年で米国を超えよ」と号令をかけ<sup>23)</sup>、総路線・人民公社・大躍進という人類史上未曾有の社会実験を強行した。一時、「大鍊鋼鉄」「大弁農業」「以鋼為綱」「以糧為綱」のスローガンを掲げるキャンペーンが全国の農村、工場で開催され、中国全土が熱病のような興奮状態に陥った。

経済原則に反した報いは早くも1960年の初めごろから現れた。自然災害・ソビエトへの債務償還と重なって、全国の工業・農業生産は総崩れの状況に陥り、中国史上最悪の飢饉に見舞われ、3000万もの人民が非正常死亡といわれる非常事態になった<sup>24)</sup>。1960年6月8日から18日まで上海で開かれた中央政治局拡大会議で、毛沢東がようやく大躍進時期における「高い数値目標」「盲目指揮」「浮誇風（法螺吹き、水増しの風潮）」「共産風」などの左傾路線の過ちを認め、『十年総結』の講話で、自分の認識の非常識、不見識を反省した<sup>25)</sup>。その後、経済建設の主導権は再び劉少奇・周恩来を代表とする穏健派の手に返され、毛沢東は国内政治の表舞台から降りて、第一線を退くことになった。

1958年から1960年までの大躍進のうねりは、当然のように『集成』の編集出版にも影響を及ぼした。前述『浙江省巻』にある『関不住的姑娘』、『三擺渡』のような新劇はまさに大躍進当時の農村を表現する劇目であった。しかし、以下の文化出版の出来事に注目すると、別の側面があることに気づく。

- 1958年2月25日 国務院科学規劃委員会古籍整理出版規劃小組が成立した。
- 1958年10月 中国戲劇家協会主編の『地方戯曲集成』が出版され始めた。
- 1959年9月 中華書局の点校本『史記』が出版された。
- 1959年 中華書局の『永楽大典』影印本730巻が出版された。
- 1960年1月19日 中国共産党中央宣伝部が計画的に外国の文化遺産を出版することに対して討論会を開催し、会議後、『關於加強和改進出版中国古籍与翻譯出版外国學術和文芸著作問題的意見』（草案）が作成された。

これらの出来事を見る限り、大躍進運動が推進された当時、農業・工業などの経済建設分野では、周恩来を代表とする穏健派が全面的に敗退したのに対して、文化・芸術分野では、根強い抵抗が堅持されていたことが分かる。それは、ほかでもなく、五・四新文化運動の一翼を担い、また、長い革命時期を経て育んできた文化・芸術の中堅的な存在として、吳晗・田漢などの実務的なリーダーたちがいたからである。この脈絡から考えると、毛沢

東が1966年の文化大革命を文化領域から始めた理由もある程度理解できると思う。

## 5. 評価を試みる

ここまで述べてきたように、『集成』の編集出版は、中国建国十周年献礼のため1957年7月に立案され、作業を始めたものである。その編集過程は「反右派運動」、「大躍進運動」とほぼ終始をともにし、そこから受けた影響も歴然と収録作品に残っている。全体的に見れば、『集成』が受けた左傾路線の影響がほぼ時系列になっており、1958年に出版された『湖北省卷』から1963年2月に出版された『遼寧省吉林省黒竜江省卷』までの15省・市・自治区卷は、その出版時期が遅くなればなるほど、その収録された作品の内容が革命的、政治的色彩を濃厚にしている。そうした趨勢の中でも、特に『湖北省卷』『安徽省卷』『北京市卷』は、政治的影響を極力排して、収録作品の幅の広さと質の高さから群を抜いていた。

しかし、幾つかの例外も見られる。『浙江省卷』と『上海市卷』は、『湖北省卷』と『北京市卷』とは対照的になっている。本来、浙江省と上海市は歴史的にも地域的にも共に文化水準の高い地域である。しかし、収録された作品は他省より明らかに劣るものが存在している。『浙江省卷』の出版時期は『湖北省卷』とほぼ同時期であるが、『湖北省卷』が1956年の湖北省第一回戯曲観摩大会の受賞作を下限にして、大躍進時期の作品を収録しない方針で臨み、作品の思想的、芸術的質を最大限に保っているのに対して、『浙江省卷』は大躍進時期の作品を大量に、急いで収録している。上海市と北京市はともに大都市として名優を大量に輩出しているが、『北京市卷』は国宝級の名優、名劇目の収録に徹底し、『上海市卷』は革命的現代劇にかなり目を向けている。それはなぜか。筆者はその地方の編集担当者の政治的傾向が反映されていると考える。

1950年代の北京市は、周恩来を代表とする文芸界穏健派の牙城だと見られていた。彭真が北京市長兼共産党書記で、明史研究の大家の呉晗が副市長の任に就いていた。周知のように、1966年に文化大革命が始まった時、毛沢東が「水をかけても全く浸透しないような（水滲不進的）資産階級の独立王国である」と定義し、最初の攻撃の矛先を向けたのは北京市である。湖北省の武漢も抗日戦争の時から郭沫若、田漢を代表とする進歩的文化人の根拠地であった<sup>26)</sup>。『湖北省卷』が『集成』の第一巻であり、田漢が自ら序文を書いた所以はそこにある。これに対して、上海市の当時の共産党書記の柯慶施は毛沢東路線の急先鋒であった。前述1957年の「南寧会議」では、毛沢東が柯慶施の「乗風破浪、加速建設社会主義的新上海」という文章を周恩来に見せて、「恩来同志、あなたは総理でしょう。このような文章をあなたは書けるのか」と聞いたそうである。「わたしには書けません」という答えを聞いた毛沢東は、「私だって書けないよ」と柯の文章を絶賛したという<sup>27)</sup>。そこから推察できることは、柯慶施本人の政治傾向だけではなく、そもそも、文化大革命時期の四人組の二人、張春橋と姚文元がすでに上海市の文化部門で権力を握り、その本領を發揮し始めたということであろう<sup>28)</sup>。浙江省の当時の要人の状況は不明だが、毛沢東は建国後ほぼ毎年、数ヶ月は杭州で過ごしたことから考えると、浙江省の文化部門がどこの省よりもいち早く毛沢東の意図を理解したことも不思議ではなからう。

われわれは現在『集成』を評価する時、毛沢東の常用手段を借りて「三七開」で評価することができると思う。すなわち、『集成』の3割が欠陥品で、主に毛沢東の左傾路線の

指導による大躍進の影響を受けた結果であり、残りの7割の成果は周恩来、田漢の穩健派によるものだと言えよう。このような評価をする根拠は以下の点にある。

- (1) 『集成』の作品の大部分は1957年以前のもので、大躍進の影響は限定的なものである。
- (2) 『集成』の編集体例は、田漢を代表とする穩健派の主導で策定され、図・表・前言・舞台写真・脚本という体系は科学的なものであった。特に各巻の前言はすべて第一線の実務者によって作成されたもので、劇種の歴史、劇目の由来など、詳しく論じており、地方戯曲の概論的なものとなっている。これらは中国の地方戯曲史研究にとって貴重な資料となっている。
- (3) 『集成』は官修の性質をもつもので、政府の力で人的・物的資源を調達することができるため、旧社会から積み重ねてきた芸術伝統・芸術成果の中には、これをきっかけに保存されるようになったものが多い。
- (4) 『集成』は新中国の最初でかつ最後の、唯一の地方戯曲文化の総結集である。それ自体が戯曲文献となり、研究価値を有する。
- (5) 大躍進時代を反映する劇目は、芸術的価値はさほど無いものの、当時の歴史を反映するものとして社会的意義が大きい。

このような諸点から、7割云々はともかく、『集成』が大きな価値を有する第一級の資料であることは疑う余地がないであろう。

『集成』は1963年2月の『遼寧省吉林省黒竜江省巻』を最後に、出版計画そのものが中断された。しかし、そこから育った戯曲文献の収集・整理の人的・物的資源は中断されることはなかった。筆者は2009年夏、吉林市文化局地方誌編集室を訪ね、地方劇資料の現地調査を実施した時、当時内部出版された大量の『吉林市戯曲叢刊』と『吉林市戯曲志』を確認することができた。『集成』のこれらの文化的資源は「反右派運動」から「文化大革命」終結までの所謂「失われた20年」を経て、1979年からはより大規模な国家プロジェクトとして、全部で10部の『中国民族民間文芸集成志書』と合流することとなった。いわば、これは一種の発展的解消と言えるのではなかろうか<sup>29)</sup>。

## 注

- 1) 「出版説明」『湖北省巻』中国戯劇出版社、1958年。
- 2) 曲六乙「戯曲花苑競艶芳一読『中国地方戯曲集成』札記」『読書』第24号、1959年。
- 3) 中国作家網、<http://www.chinawriter.com.cn/zxhy/member/9752.shtml>（アクセス日、2012年2月20日）。
- 4) 「出版説明」『湖北省巻』中国戯劇出版社、1958年。
- 5) 表1は筆者が『中国地方戯曲集成』（十五省市自治区巻 全22冊、1958年-1963年）により整理したものである。
- 6) <http://jiten.biglobe.ne.jp/j/f6/c5/1f/0f3b0031a45f7e101a1290015412aad2.htm>（アクセス日、2012年2月20日）。
- 7) 「序文」『湖北省巻』中国戯劇出版社、1958年。
- 8) 聞耳「我国戯曲の精華一紹介『戯曲選』」『読書』1959年第23期、P17。
- 9) 「社論」『人民日報』1956年5月18日。
- 10) 「前言」『山西省巻』中国戯劇出版社、1959年、P14。
- 11) 「前言」『安徽省巻』中国戯劇出版社、1959年、P2-3。
- 12) 「前言」『安徽省巻』中国戯劇出版社、1959年、P7-8。



- 13) 1959年の春、周恩来が冶金部の会議で「两点論」を提出。通俗的な言い方では「二本足で歩く」と言われる。その主旨は、経済建設における中央と地方、群衆運動と党の集中指導、大中小の企業、土と洋の両方とも重視すべき、総合的なバランス感覚を保つことが重要だということである。大躍進当時の「一辺倒」の傾向を修正する指導方針となる。なお、文芸界での「二本足で歩く」ということは伝統劇の重視と現代劇の兼顧を意味する。
- 14) 1958年、歴史家范文瀾が胡適の資産階級歴史観を批判するために、『人民日報』で「歴史研究必須厚今薄古」の論文を発表した。5月5日から23日、中国共産党第八回全国大会が北京で開かれたとき、范文瀾も候補中央委員として出席した。毛沢東はその席上何回も立ち上がって発言した。「今日、私は大変嬉しい。范文瀾同志が厚今薄古の観点を提出した。私は彼の文章を読んだ。大変立派なものだ」、「私からもう一人、補足しておきましょう。秦の始皇帝のことだ。秦の始皇帝は厚今薄古の専門家だ」。同年の年末、『歴史研究』の第五号に、郭沫若、范文瀾、侯外廬、呂振羽、劉大年、陳垣の六教授の連名で「歴史研究必須厚今薄古」の論文が掲載された。
- 15) 吉劇は吉林省が1959年の建国記念日に合わせて作った、新しい劇種である。東北地方の民間劇「二人転」を土台に、幾つかの地方劇の要素を加味して合成したものである。吉林省吉劇団は1960年に成立。有名な劇目には、『包公賠情』、『燕青売銭』、『桃李梅』などがある。
- 16) 毛沢東「延安における文芸座談会での講話」『毛沢東選集』第2巻、人民出版社、1953年。
- 17) 中国社会科学院当代研究所『中国人民共和国国史網』<http://www.hprc.org.cn/gsgl/dsnb/>（アクセス日、2012年2月20日）。
- 18) 陸定一「百花齊放、百家争鳴」『人民日報』1956年6月13日。
- 19) 「反右派運動」の関係資料は未だに公開されていない。ここでの引用数字は「維基百科」によるものである。  
<http://zh.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%8D%E5%8F%B3%E8%BF%90%E5%8A%A8>（アクセス日、2012年2月20日）。
- 20) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録1949-1957』、P19。
- 21) 孫業礼、熊亮華「陳雲の『検討』」張湛彬、劉傑輝、張國華編『「大躍進」和三年困難時期の中国』、P46。
- 22) 楊明偉「周恩来提出了辞去総理職務的請求」前掲書、P14-15。
- 23) 1958年6月21日、毛沢東が中央軍事拡大会議で講話。前掲書、P36。
- 24) 非正常死亡の具体数は1500万、2000万、3000万の諸説がある。主に中国外の専門家の推計である。ここでの引用数字は「維基百科」によるものである。  
<http://zh.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E5%B9%B4%E5%9B%B0%E9%9A%BE%E6%97%B6%E6%9C%9F>（アクセス日、2012年2月20日）。
- 25) 馬雲飛『「三分天災、七分人禍」提法的由来』前掲書、P356。
- 26) 「前言」『湖北省卷』中国戯劇出版社、1958年、P3。
- 27) 柯慶施の「乗風破浪、加速建設社会主義的新上海」という文章は1957年12月25日の上海市共産党代表大会での講話である。前掲書、P46を参照。
- 28) 張春橋は1958年10月13日の『人民日報』で『破除資産階級法権』という文章を発表し、毛沢東に認められ、1959年1月から中国共産党上海市委員会常務委員となった。姚文元は1948年に中国共産党に入党。解放後は上海市共産党盧湾区委員会宣伝工作に携わり、『萌芽』雑誌、『文芸月報』の編集、『解放日報』の編集委員を歴任。1955年に胡風を批判した『分清是非、劃清界限』を発表し、張春橋の注目を浴びる。その評論活動から1950年代中ごろまでに毛沢東の知遇を得た。鳳凰網：<http://apphistory.news.ifeng.com/figure/detail.php?id=30>（アクセス日、2012年2月20日）。
- 29) 1979年、中国文化部、国家民委、中国文聯などの主催で、国家重点プロジェクトとして、10部の『中国民族民間文芸集成志書』の編集・編纂が策定された。30年を経て、10数万人の専門家たちを動員して、ようやく2010年に完成した。全部で298部450冊約4.5億字の大著作となった。朱基釵、袁晞『『中国民族民間文芸集成志書』編集出版』『人民日報』2010年4月16日。

キーワード：中国地方戯曲 田漢 毛沢東 周恩来 文芸政策

付記：本論文は、平成二十三年度科学研究費補助金・特別推進研究 課題番号20001001  
「清朝宮廷演劇文化の研究（代表者：磯部 彰）」の成果である。

(CHEN Zhongqi)